慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	訃報
Sub Title	
Author	西岡, 芳文(Nishioka, Yoshifumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.137(459)- 138(460)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

訃　報

元三田史学会会長　高橋正彦先生は、二〇〇四年一月七日午前〇時七分、肺炎のため逝去された。享年七十二歳。葬儀は一月十一日午前十一時三〇分より麻布善福寺会館において、故人の遺志に従い無宗教式で行われた。

高橋先生は昭和六年十二月二十三日、東京に誕生され、幼稚舎より慶應義塾に学び、昭和三十三年三月に本塾大学院文学研究科修士課程を修了されると同時に文学部副手に採用された。同三十六年に助手、四十二年に専任講師、四十六年に助教授、五十年に教授となられ、平成九年三月に定年退職されるまで、一貫して慶應義塾において教育・研究の任にあたられた。

この間、昭和五十一年には日本古文書学会理事・評議員、平成五年十月には同学会会長の重職をつとめられ、平成七・八年度には三田史学会会長を歴任されたほか、非常勤講師として聖心女子大学・法政大学・鶴見大学・國學院大学・立正大学などに出講された。

高橋先生は一貫して日本古文書学を専攻分野とされ、本大学の史学科最初の中世史専門のゼミを担当して後進の指導にあたられた。『大工頭中井家文書』（慶應通信、一九八三年）や『慶應義塾所蔵古文書選』（全四冊、慶應通信、一九七八～八三年）などの古文書翻刻・紹介のお仕事をはじめ、『日本古文書学講座』（雄山閣出版）『日本古文書学論集』（吉川弘文館）の編集にたずさわり、日本古文書学の学術的基盤確立のために尽力された。また東京都港区・大田区において、区史の編纂や文化財調査を委嘱され、数々の成果をあげられた。

このほか、得意の書道の知識と技術を生かして、教職課程の「書道」の指導も担当され、通信教育課程教材として書き下ろされた『書道―中国と日本の書の流れ―』（慶應通信、一九七七年）は今も広く利用されている。

毎週火曜日第一時限と定められていた「古文書学」の講義は、定刻に始まり、試験や出席について厳格であることによって日本史（国史）専攻の名物講義であった。実物の中世の古文書をふんだんに使用した大学院の古文書学の講義もまた、本学で教えを受けた者の史料に対する学力の向上に貢献した。

高橋先生は常々、歴史学の今宮新、古文書学の伊木壽一、書道史の西川寧の三先生を恩師として尊敬され、学風を慕われていた。特に自ら麗筆をふるわれる立場からの古文書への鑑識眼は、他の追随を許さなかったが、書

道史と古文書学を融合させた研究成果を、まとまった形で残されなかったことは残念である。

本学を定年退職されてからしばらくは、名誉教授として古文書学の講義を受け持たれたが、ほどなく不幸にしてパーキンソン病に冒されるところとなり、外出も難しい情況になられた。一昨年秋には、自らの最期を悟られ、不自由な口で葬儀その他の後事を私たちに託された後、急速に病状が進み、不帰の人となってしまわれた。

高橋先生が教員として着任される以前、本学出身で日本中世史を研究する人材は寥々たるものであったが、今やご在職中に育てられた門下生が全国的に活躍している。今後の三田中世史学の発展こそ、先生への何よりの供養なれと信じつつ、ご冥福をお祈り申し上げたい。

（西岡芳文）